

子ども時代の私と遊び・手の労働

部室作りと生徒自治

名古屋大学 森 下 一 期

少し年齢が上の方になるが、青年期の手の労働の典型とも考えられる経験を紹介しよう。

私は1960年前後を都立大学付属高校で過ごした。戦前は府立高校といって中学高校が一体となった7年制の学校だったという。名前の連続性から都立大学の方が付属で、高校こそが本流だ、と意気がってもいた。生徒自治会と称していたように、伝統と並んで自由、自治といった言葉が生きていたように思われる。

私自身は自治会活動をしていたわけではなく、難しい言葉を使っている同級生を別人種のようにみていた。天文気象部というクラブで、人工衛星や流星を徹夜で観測したり、記念祭（文化祭をこう称していた）では教室一杯になるような組立式のプラネタリウムのドームを作ったりしていた。

何がきっかけだったかははっきりしないが、クラブの部室を自分達で作ろうではないかという話になった。地理の教師がこつこつと自分の家を作っていて、ときどき生徒にその話をしていたことも影響しているだろう。私などはその口で、すごいなーとか、本当にできるかなーと思っていた。だが、それだけでないのは、これが生徒自治会の取り組みとなったところにみられる。

生徒の自治活動自体は関心をもった一部の生徒に限られていたのではなく学校生活全体に定着していたと思う。クラブ活動、記念祭の運営など、何事も生徒の自主的な活動に任されており、クラブの予算配分なども生徒の会議で決定していた（少なくとも私の目には教師の姿は見えなかった）。一学年3学級の小規模校で、みすばらしい木造校舎が敷地の片隅にあるだけといった教育条件の悪さに対する要求の一つとして、部室の設置があったと思われる。それが、

自分達の手で作ろうという課題となった。材料代を学校が出したわけだから、なんらかの交渉が行われたのだろう。

私はいつの間にか実行する場の責任者ようになっていた。くだんの地理の教師に教わりながら2.5間×1.5間の部室の設計図をかいた。何しろ生徒自治会の取り組みだから、生徒全員にイメージをもってもらわなければと、よくも知らない透視図でかき、カッティングが得意なものがガリ板に切って、黒ラシヤ紙に白インクで印刷するといった凝ったことをした。

製作は各クラスから要員が出てきて柱や板の加工をする。女子もいるから技術指導をしなければならない。2.5間というのは厄介なもので、桁を継がなければならない。その墨付けはもっぱらこちらに回ってくる。2学期に始めて、建前となったのは11月末くらいだったか。何人かの教師に手伝ってもらいながら、棟上げをして、その前で生徒集会をしながら、銘を入れた板を梁に打ちつけた。

その後、屋根を葺いたり、壁を作ったり、まだまだ仕事は続く。私はほぼ毎日出たのではないだろうか。日が早く落ち、暗くなるまでやっていたが、もう2年の終わりだということもあり、家には図書館で勉強してきたと言い訳していた。

その部室は20年近くその場で活用されていたという。数年前、校地の整理から移転か、廃棄かになると話に聞いた。

私の場合はこの取り組みを通して人との関わり—教える、まとめる、分担する、組織する—といったことも学んだように思う。当時知っていたわけではないが手の労働の総合的な性格が実にうまく生かされていたといえる。